

雑誌にみる太宰治像（1948年6月から12月まで）（2017） Image of Osamu Dazai in Magazine(from 1948.6 to 1948.12) (2017)

劉 宇婷¹
Yuting LIU

¹ 同志社大学 社会学研究科 メディア学専攻 University of Doshisha
中国南通大学外国語学院 講師 University of NanTong

要旨…本研究は太宰治受容史にとって非常に重要な一年である1948年の雑誌の太宰関連報道に焦点を当てる。1948年6月太宰玉川上水心中から1948年12月まで、雑誌における太宰関連情報の中で語られていた太宰治像、情死報道が後の太宰受容に与えた影響、及び報道過程で雑誌の果たした役割を明らかにする。

キーワード 太宰治像、内容分析、言説分析、太宰神話、第一次太宰ブーム

1. はじめに

周知のとおり、1948年6月13日深夜から14日未明にかけて、太宰治は愛人の山崎富栄とともに玉川上水に入水した。遺体は19日の太宰誕生日に発見された。その間、この事件を、新聞は盛んに報道した。やがてそれが一段落すると、舞台は雑誌に移った。週刊誌が追いかけるようになり、また文芸誌でも追悼特集などが組まれた。その結果、ジャーナリスティックな意味合いにおける太宰治に関する認知度は、飛躍的に広がっていた（川崎2005）。また、滝口（2009, 2016）が指摘したように、筑摩書房の社史では、「太宰治が玉川上水へ飛び込んだ途端に、新聞でも、ラジオでも、連日太宰を話題に取り上げ、『ヴィヨンの妻』が、たちまち売切れてしまった。七月二十五日発行の奥付で出た『人間失格』は、ベストセラーになり、二十万部売れた」（和田2011：117）¹という。

要するに、1948年は、太宰治受容史にとって非常に重要な一年である。新聞、雑誌といったメディアは、太宰像の形成において、非常に重要な役割を果たしたといえる。では、この年に、メディア上では没後の〈太宰治〉についてどのように語られていたのか。それにより、どんな太宰治像が提示され、後の太宰受容にいかなる影響を与えたのか。本研究は、雑誌によって語られた没直後の太宰治像、および報道過程で雑誌の果たした役割を明らかにする。雑誌を主な研究対象とした理由は、太宰没後、雑誌に大量の太宰関連情報が掲載され、分析対象とするのに適していると考えたためである。

2. 研究方法

研究方法は以下のとおりである。まず、雑誌の太宰関連情報を、①太宰の情死への言及；②文芸批評中心²のもの；③具体的な作品への言及（どの作品が挙げられたのかを含む）、という三つの面から量的統計を行った上で、ジャンル別にみる。次に、①文芸批評中心記事の中で太宰とその文学はどのように評価されていたのか；②太宰の情死への言及がある記事の中で、太宰の「死」がどのように議論されていたか、言説分析を行う。以上を踏まえて総合的に提示された太宰治像を、〈有名性〉という文脈で捉えながら、太宰神話とのかかわりも視野に入れつつ結論づける。

3. 雑誌における太宰関連情報（1948年6月から12月まで）

「20世紀メディア情報データベース」³（2016年10月1日現在）を利用して、記事タイトルに「太宰」を入力し、太宰没後から1948年12月までの検索をかけ、ヒットした記事を整理した。また『近代作家追悼文集成[32]菊池寛 太宰治』と『太宰治論

¹ 滝口の指摘によると、筑摩書房の社史では、太宰が亡くなる前、『ヴィヨンの妻』などが売れなくて、倉庫に山積みになっていたという。

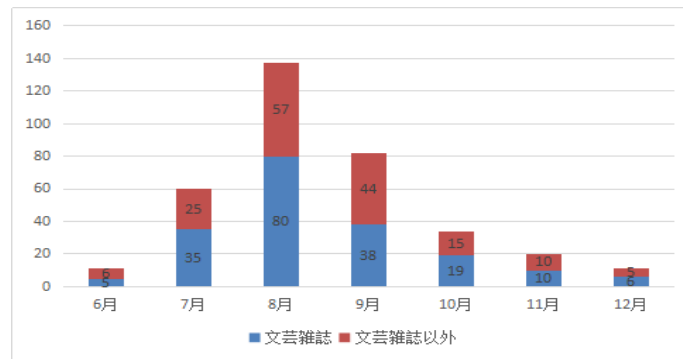
² 日本国語大辞典によると、文芸批評とは、「文芸の思潮や作品に対する批評。文芸評論」のことをさす。JapanKnowledge, <http://japanknowledge.com>, (参照 2016-12-05)。なお、ここでいう文芸批評は、太宰治とその文学を中心とする批評を指す。

³ <http://20thdb.jp/>

集『同時代篇』も参考にし、雑誌における太宰治関連情報（1948.6～1948.12）を作成した。

これにより、まず、太宰没後から1948年12月までの雑誌における太宰関連記事数が355件あることがわかった。これは非常に高い数値である。同年（1948年）3月に、有名な作家菊池寛も亡くなった。しかし雑誌における菊池寛関連情報（1948.3～1948.9）の記事数はわずか80件だった。太宰とははっきりとした対照をなしている。次にこの355件の記事を月別に見ると、図1の示すとおり、太宰没後の6月から8月までは記事数が増加の傾向にある。8月の太宰関連記事数が一番多く、137件もある。8月を境に、12月まで記事数が次第に減少する⁴。

図1 月別にみる雑誌の太宰関連記事数（1948.6～1948.12） 単位：件



このように雑誌をはじめとするメディアの大量かつ集中的な報道により、太宰治の名が一躍広がったと見られる。

4. 雑誌における没後の太宰関連情報の内容分析

4. 1. 分析の結果

①太宰の情死への言及のある記事が大多数を占める

前述からわかるように、太宰没後、雑誌に数多くの関連記事が現れた。この大量の露出（有名性）は、やはり太宰玉川心中事件＝スキャンダルによるものなのだろうか。それを確かめるために、筆者は太宰情死への言及がある記事の件数を調べた⁵。表1からわかるように、雑誌における太宰関連記事の中に、太宰の情死への言及のある記事が大多数を占める。つまり、文芸雑誌から総合誌、婦人誌などに至るまで、「太宰治」が大量に露出（有名性）していた。そしてその露出には、彼の情死がかかわっている。

表1 情死への言及がある関連記事の件数

情死への言及がある関連記事	310件
	88.3%

②文芸批評中心の記事が少ない

一方、太宰関連記事の内実はどのようなものなのだろうか。太宰が作家であるため、記事の内容がやはり文芸批評中心のものなのかという疑問を念頭に、筆者はその件数を調べた。表2からわかるように、文芸批評中心の記事が多いとはいえない。しかもその一部は、太宰治の作家としての業績についての評価のかわりに、その死をめぐる批評である。さらに、それをジャンル別にみると、文芸雑誌の文芸批評中心関連記事が一番多く72件ある。文芸雑誌以外は32件ある。

表2 文芸批評中心太宰関連記事の件数

文芸批評中心関連記事	104件
	29.6%

⁴ 9月、10月、11月、12月の記事数がそれぞれ82件、34件、20件、11件であった。

⁵ ただし、原本不鮮明の記事（4件）は分析から除外した。このようにして最終的に分析の対象となった記事数は、351件である。

③太宰作品への言及のある記事が多い

次に、筆者が太宰関連記事に目を通したとき、文芸批評中心の記事が少ないわりに、記事の中に作品への言及が多いという印象を受けた。それを確かめるために、太宰作品への言及のある記事の件数を調べた。表 3 からわかるように、太宰没後、雑誌における太宰関連情報の中で、太宰作品への言及のある記事も非常に多い。そのうち、文芸雑誌の太宰作品への言及のある記事は 138 件あり、文芸雑誌以外は 120 件ある。ほぼ同じである。

表 3 太宰作品へ言及する関連記事の件数

太宰作品への言及のある関連記事	258 件
	73.5%

4. 2. 考察

このように、まず 1948 年没直後の太宰の雑誌メディアへの大量の露出（有名性）は、文芸批評ではなく、主に情死事件＝スキャンダルによるものであることがわかった。石田佐恵子によると、「引退したスターや死後の＜有名人＞ですらメディアに登場し続ける限り、その＜有名性＞は維持されることになる」（石田 1998＝2000：57）が、太宰の場合、スキャンダラスな情死が原因で雑誌等のメディアに登場し、＜有名性＞を獲得したのである。

次に、太宰文芸批評中心の記事が少ないわりに、作品への言及が多いのは、①作品から太宰の死の真相や太宰の人となりを探る記事が多い；②太宰との交友を追憶するときに、作品への言及があったためである。ここで特に注意してほしいのは①の語り方である。例として、たとえば、

彼の短篇「花燭」には・・・・・・男爵というのはいわばあだ名である北国の地主のせがれにすぎない、この男はその学生時代、二、三の目立つた事業をした。恋愛と、酒と、それからある種の政治運動、牢屋に入れられたこともあった。自殺を三度も企て、そうして三度も失敗している、多人数の大家族の間に育つた子供にありがちな、自分ひとりを余計者と思ひ込み、もつぱら自分を軽んじて、甲斐ない命の捨てどころを大あわてにあわてて探しまわっているというような傾向・・・・・・と述べている、もちろん男爵とあだ名される主人公は彼自身のことである、（後略）（太田剛「太宰治の死とその愛人」『ヒロバ』第3巻第7号1948. 7）

などがある。雑誌の太宰関連記事の中に、このような「作中人物＝太宰治」の語り方が散見される。これは、一種の「本来対象であるはずの作家像を実体（論）的に思い描きながら、作中人物と現実世界の作家とを素朴に重ねあわせ、かつ、そのことを自明の前提とする」（松本和也 2009：5）認識枠組／読解枠組＝太宰神話といえよう。新聞学者の山本明は次のように、「太宰の死後、今日までの読者」と太宰生前の読者はだいぶ違うという興味深い指摘をしている。「第一に、現在の読者は、太宰の生涯と太宰の作品とを混同し、あるいは同一線上でとらえる人が大部分である。戦前の読者は太宰個人について、ほとんど何も知らない人ばかりであった。作品は自立して読まれていた。今日は太宰の生涯をたどりながら作品を読む人が多い。」（1982：98）。確かに筆者の調べたところ、戦後から太宰心中までの雑誌の太宰関連記事のうち、作中人物と現実世界の作家を素朴に重ね合わせる読み方をする記事は少なかった。しかし情死を境に、ジャーナリズムによる太宰の私生活の暴露、及び上述で確認したとおりの大量の語り方により、「太宰神話」は大いに増幅されたのである。

では、なぜ太宰の情死を境に、このような語り方＝読み方が大量に現れたのだろうか。いうまでもなく新聞ジャーナリズムによる太宰の私生活の暴露が原因の一つであるが、それ以外にも、太宰治のスキャンダラスな死には、有島武郎のようにはっきりした死の原因がなく、さまざまな謎が秘められていたことも挙げられる。新鋭作家の太宰治であり、これからどんどん売り出していくはずの太宰治であるが、何ゆえ突然の死を選んだのか。さらになぜ妻以外の女性との心中という「意外」な死に方をしたのか。さまざまな謎が秘められているがゆえに、真相を知りたいという欲求がかきたてられる。批評家や読者達は、太宰の作品に答えを求めているようである。これにはまた太宰の小説の性質がかかわってくる。太宰の小説には、「私」を主人公とするものが大多数を占める。しかも同じようなエピソードが複数の作品の中で繰り返されている（松本 2002）。それゆえに、小説に書かれた内容が作者太宰の経験したこと、感じたものであり、太宰の情死の真相を探るなら、彼の後期に書かれた作品を読みあわせたいという読み方、語り方が、雑誌に大量に現れたのである。さらに、筆者は、具体的にどの作品が挙げられたのかという統計も行った。表 4 の示すとおり、処女作『晩年』と後期の作品『斜陽』『人間失格』『グッド・バ

イ』『ヴィヨンの妻』『如是我聞』『桜桃』についての言及が多い。これらの作品は、ほとんど私小説の色彩が濃い作品である。

表4 具体的に挙げられた作品 上位10作品

	作品	言及された回数
1	斜陽	144回
2	人間失格	104回
3	晩年	70回
4	グッド・バイ	64回
5	ヴィヨンの妻	58回
6	如是我聞	50回
7	道化の華	44回
8	桜桃	37回
9	虚構の彷徨／ダス・ゲマイネ	32回

5. 雑誌における没後の太宰関連情報の言説分析

①太宰その人とその文学への評価

1件ずつ記事を確認したところ、太宰その人への評価の中に、「ニヒリスト」、「虚無」、「弱い」、「はにかみ」、「自意識過剰」；その文学への評価の中に、「敗北の文学」、「道化一奉仕」、「自虐」、「ユニーク」、「ロマンス」、「反俗」などの発言が多いことがわかった。たとえば、下記のような発言が散見される。

テクにシヤンの彼のことだから、これを、真実味があると書いて味の字をつけた方に安心のゆくようなところはあるが、ともあれ、太宰治の神経衰弱は、まったく、彼の常在の感覚であり、また、その神経衰弱を武器として、彼が唯一の生命としての<文字>に取り縋っていたことが確であったほど、太宰治は、その意識過剰と、その意識混乱と、その皮膚感覚を文学したのである。彼は、神の寵児というよりも、神の前に立ち得なかつた訳だが、ともあれ、究極の良心の前で、文学しようとした彼の人間性を、ともあれ、我々は認めてよい。(山岸外史「太宰治と封建主義」『人間喜劇』1948.9)

これらの言説は、おおむね好意的なものが多い。しかし一方、「弱い」、「ニヒリスト」、「意識過剰」としての作家太宰治というイメージを形成させ、流布させ、肥大化させたきらいもあるように思われる。

②太宰の死への言及

(1) 太宰の死を愛惜する声が聞こえる

太宰治の突然の死に対し、多くの関係者や執筆者は愛惜の感情を抱いていた。そこで豊田をはじめとする名の知れた人や関係者などに愛惜される太宰イメージが誌面に形成された。

太宰君が自殺した。作家の相つぐ死にそれほど心傷まなかつた僕も、彼の死には非常に身近かなものを感じ、おもはず落涙した。太宰君に見すてられたやうで、情なく、恨めしい(豊田三郎「文藝時代後記」『文藝時代』1948.7)

それを読み、一般大衆は、太宰治の死が惜しいことだぐらいの知識を得ただろう。

(2) 有島武郎・芥川龍之介などの死と一緒に論じたり比べたりする傾向がある

自殺した作家の系譜には有島武郎、芥川龍之介などがある。そのため、太宰治の情死への言及のある記事の中に、太宰の死を有島武郎などの死と一緒に論じたり比べたりする傾向が見られる。たとえば下記のような言説が散見される。

(ア) 太宰治氏が亡くなった。われわれは、二十世紀の旗手を失った。氏の文学が、たうてい量の上では死ねぬ文学で

あることは早くから多くの人々の一致した意見であつたが、それにしても余りに早過ぎたといふ感が深い。文壇としては芥川龍之介以来の事件であるが、あらゆる意味で若い人達のホープであつた太宰氏の死は単に文壇のみならず、多くの青年達にとって手痛い打撃であるに違ひない。自らの文学に死を賭し、偶像破壊の旗手としてそのユニークな天才を飛躍させてゐた氏の自ら選んだ死の道は悲愴である。(斎藤十一「編集後記」『新潮』1948.6)

(イ) 早い話が、有島、芥川の死は、今度の太宰の死などよりはるかに深く、かつ大きい社会的意義をもつていたと断言できるが、それでも報道陣は、今度のようにエグゼツない、卑俗な態度はとらなかつたように思う。(改行) 最近はさらに相手の女の日記というものが、ある週刊誌のほとんど全紙面を使つて発表されているが、果してその雑誌の広汎な読者層が編輯者の発表理由としてかかづているような問題を考えるような種類の人たちであるかどうか。(中野好夫「志賀直哉と太宰治」『文芸』1948.8)

まず、(ア) では、太宰治の自殺は文壇ですでに確固たる地位を築いた芥川龍之介の自殺と比べたり論じたりされている。このような言説により、太宰の知名度がある程度あげられただろう。ただし(イ)のように、有島などの死が太宰の死より、よりいっそう社会的意味があるという発言も見られる。確かに、有島や芥川は、生前、すでに名の知れた作家で、文壇からも高く評価されていた。それにしても、なぜ太宰の死がメディアにより大々的に取り上げられていたのだろうか。

6. 第一次太宰ブームが起きたわけ

第一次太宰ブーム(=太宰関連記事が大量に現れ、話題となり、それを載せた雑誌の売行きも好調だった現象)が起きた原因のひとつには、前述したようにその情死にはさまざまな謎が秘められていたことがあるのではないだろうか。それゆえ、太宰の死について言及し、死の原因を探る大量の記事が現れ、話題となったのだろう。これはまた読者の好奇心の満足、購読行動へとつながっていく。典型的な例は、「太宰治事件ダイジェスト」(『美貌』1948.8)である。以下はその抜粋である。

何故の情死?

太宰治は、なぜ情死したか?原因は、いろいろ考えられるが、大体、次の三点に尽きるのではないであろうか。

- 一、私生活(特に対女性生活)の行詰り
- 二、芸術上の行詰り
- 三、病苦の果て

一については、相手役の山崎富栄の遺書および日記、その他、彼を取巻く女性の談話が重要な鍵となる。

二については、彼の最近の創作類を読み合すと、ハハア先生、やつぱり死ぬつもりだつたんだナと思ひ当る。

三の病苦は、三つの中で案外薄弱だつたのではなかつたかと思われる。昨年来、咯血し、最近でも、盗汗、血痰、微熱などの徴候はあつたらしいが、若い時から扱ひ馴れた肺浸潤性であり、一時に刺身入切れをペロリと平げるほどの胃ノ腑に恵まれていたという話だから、この「病苦」ダケを切り離せば大したことではなかつたかと思ひれる。

このような記事の語り方は、読者の好奇心をあおり、購読を促したと考えられる。

第一次太宰ブームが起きた理由のもうひとつは、太宰のスクヤンダラスかつ魅力的ないきさまと、それを商品化・物語化する雑誌の語り方にあると考えられる。その典型的な例は「知られざる恋の二重奏 太宰治の鎌倉心中未遂事件の真相 作家の若き日の恋愛秘帳」(小田原真二『女性之窓』1948.12)である。

もう十一月も中旬というとき、純子より確実な上京の日時を告げて来た。

本所の家には、新妻から送られた新家庭の調度品の荷物が山と積まれた。しかし彼はその荷物に指一本触れる気力もなく、今なほ右しようか左しようかと焦るばかりで、頭のなかは混乱して今にも発狂するのではないかと思われるほどであつた。

彼はそのとき、純子の訪問を受けたのである。日夜眠る暇なく前の男におびやかされ、めつきりやつれを見せた彼女の弱弱しい姿を眺めた彼は、可憐さということもいえず、ただじりじりするばかりである。

ところが、純子から意外な相談をもちかけられたのである。

「修治さんお願いします。お願いします。私たちは死ぬより外に……道がないのです。これ以上純子は生きる勇気はありません、お願いします」

血の出るような訴え、もう涙さえ枯れ切っているのだ。彼女には死以外に何ものもなかった。

彼女を脅迫する男が、彼の身辺まで迫つて来ているのだ。しかし彼は、何も恐ろしくはなかった。

今にも発狂しそうな頭をかかえている彼は、彼女の死の誘いに、なんのわだかまりもなく応じてしまった。（後略）

上述は太宰の鎌倉心中の真相をあたかも知っていたかのような口ぶりで語っている。しかも死のうと言い出したのが、純子のほうであると描いている。それにより仕立てられたのは、愛に殉じ、純粹で心優しい太宰治のイメージである。このような太宰の私生活を商品化するセンセーショナルな語り方により、スクヤングラスかつ魅力的な太宰の生きざまと、純粹でやさしい太宰治イメージが大眾に伝わったのだろう。

7. まとめ

このように、「太宰治」は、スクヤングラスな「死」により、雑誌に大量に露出し、その名も飛躍的に広がった。しかしその一方で、作家の業績を評価する文芸批評中心記事は少なく、しかもその中から読み取れるキーワードは「ニヒリスト」「道化」「敗北」などで、太宰の文学史における地位の向上には繋がらなかった。太宰の死後に起きたブームが一年も経たないうちに下火となり、小林信彦が1950年頃の太宰を「黙殺された天才」であると言った感想も理解できた。この情死報道において、雑誌メディアは①太宰の知名度を高め；②太宰神話を増幅させたという役割を果たしたと指摘できよう。

参考文献

- 1) 松本和也・齊藤理生編(2009)：新世紀太宰治，双文社出版。
- 2) 滝口明祥(2016)：太宰治ブームの系譜，ひつじ書房。
- 3) 浅岡隆裕(2012)：メディア表象の文化社会学——〈昭和〉イメージの生成と定着の研究，ハーベスト社。
- 4) 佐伯順子(2012)：明治〈美人〉論——メディアは女性をどう変えたか，NK出版。
- 5) 石田あゆ(2006)：ミッチー・ブーム，文芸春秋。
- 6) 佐藤卓己(2002)：『キング』の時代—国民大衆雑誌の公共性，岩波書店。
- 7) 大石祐(2005)：ジャーナリズムとメディア言説，勁草書房。
- 8) 石田佐恵子(1998)：有名性という文化装置，勁草書房。
- 9) 松本和也(2002)：虚構の物語としての『思ひ出』・序説——自伝的受容からテキストを読む地平に向けて，『文芸研究』153号。
- 10) 川崎賢子(2005)：太宰治の情死報道——ブラング文庫資料とその周辺から，『叢書 現代のメディアとジャーナリズム 第五巻』ミネルヴァ書房。